

国立がん研究センターが7月、興味深い予測を発表しました。今年、新たにがんと診断される人は88万2200人、亡くなる人は36万7100人になるとの内容です。高齢化を背景に、患者数は2010年より約7万7000人、死亡者数は12年より約6000人増える見込みです。

がん社会 を診る

中川 恵一

この予測を、がんの部位別にみてみましょう。患者数では胃が首位で13万7000人、2位は肺で12万9500人、3位は大腸で12万8500人でした。これらが日本人の「3大がん」で、がん全体の44%を占めます。このほか、乳、前立腺、肝臓、膵臓(すいぞう)のがんが続いています。一方、死亡者数トップは肺で7万6500人と、2位の

「膵臓」、早期発見難しく

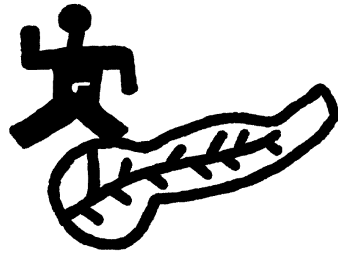
胃(5万3000人)、3位の大腸(4万9500人)を大きく引き離しています。喫煙率が高い世代が高齢化していることが原因とされます。日本たばこ産業(JT)によると、現在の日本人の喫煙者率は2割を切っていますが、1965年の男性の喫煙者率は82%にも達していました。

そして、がん死亡者数の4位は膵臓(3万1900人)、5位は肝臓(2万9700人)で、12年の統計から順位が入れ替わっています。膵臓がんの発生数は3万7700人です。いかに治りにくいか分かります。

膵臓がんは早期発見が難しく、見つかった時にはかなり進行しているケースが多いため、5年生存率は10%足らずです。がん全体の約6割と比べ格段に低いのが現状です。

国内の大規模疫学調査の結果、糖尿病になると膵臓がんのリスクが2倍になることが分かっています。そして、厚生労働省の12年の国民健康・栄養調査によると、「糖尿病が強く疑われる成人」は男性の15.2%、女性の8.7%。合計950万人と、07年の調査より60万人増えています。

(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美